チークの形状が顔の大きさ知覚に及ぼす影響

○仲渡江美

(愛媛県立医療技術大学)

キーワード: チーク, 顔の大きさ, 錯視

Effects of the shape of the cheek color blush on the perceived size of the face

Emi NAKATO

(Ehime Prefectural University of Health Sciences)

Key Words: the cheek color blush, the perceived size of the face, visual illusion

目 的

化粧は、女性の魅力を高める一つの役割を果たすことが知られている (e.g. Nash et al, 2006). 近年では、化粧による顔や目の大きさの効果についての研究が行われている (e.g. Matsushita et al, 2015). しかしながら、これらの研究は主にアイメイクに関する研究であり、チークを用いた研究はこれまでに行われていない. チークとは肌に自然な血色をもたらすものであり、自然な陰影をつけて顔を立体的に見せ、顔の形状をカバーするなどの効果があるメイクの技法の一つである.

本研究では、チークの形状によって、顔の大きさの知覚に違いがみられるのかについて検討した.

方 法

実験参加者: 女子大生 16 名 (平均年齢 20 歳)

刺激: 写真・イラスト素材マーケットプレイス「PIXTA」のメイク女性の顔のイラスト画を使用し、携帯アプリ「YouCamメイク」でイラスト画にピンク色のチークを施した. 施したチークは、2 形状 (circle と line) x 2 方向 (diagonal と straight) の 4 種類であった. これら 4 種類を標準刺激として用いた. さらに、チークを施していない画像を比較刺激として用いた. 比較刺激の大きさは、80~110%まで変化させた.

手続き: 標準刺激と比較刺激を、各 1 枚ずつ左右に並べてコンピューター上に提示し、比較刺激の顔の大きさが標準刺激の顔と同じ大きさであると知覚されるように、マウスを使って比較刺激を調節させた (調整法). チーク 1 種類につき上昇下降各 1 回、合計 8 試行を 8 名に行った. 画像の左右を入れ替え、同じく上昇下降各 1 回、合計 8 試行を残りの 8 名に行った.

Fig. 1 実験で用いた標準刺激と比較刺激

結 果

Fig. 2 チークの種類ごとの顔の大きさの平均

line-straight 条件のみに 100% との比較において有意差が見られた ($t(15) = -2.440, p < .05$). つまり, line-straight 条件は、オリジナルの顔の大きさより、顔が小さく見えることが示された. 一方で、各条件間では有意な違いは認められなかった.

考 察

今回の研究では 4 条件のうち、1 条件のみに顔の大きさ知覚における錯視が生じた結果となった. line-straight 条件は、他の条件と比べ、ほぼ骨にそってチークをシャープに描いていたため、顔が引き締まり小顔に見えたと考えられる. 一方、他の条件に効果が見られなかった原因として、チークの色が顔の大きさ知覚に影響を及ぼす可能性が考えられる. 森川 (2012) のシェーディングによる小顔錯視では、陰影や奥行きによって錯視が生じている. 今回の実験では、チークに使用する色はピンク系の鮮やかな色であったため、鮮やかな色では陰影を生じさせることは難しく、顔の大きさの知覚よりも、印象の変化に留まってしまった可能性がある. したがって、今後、チークに使用する色を変化させ、チークの形状と色のいずれが顔の大きさ知覚に影響を及ぼすのかについて検討する必要があると考える.

引用文献

- Matsushita, Morikawa, Mitsuzane, & Yamanami (2015). Eye shape illusions induced by eyebrow positions. *Perception*, 44(5), 529-40. 森川和則 (2012). 顔と身体に関連する形状と大きさの錯視研究の新展開: 化粧錯視と服装錯視. *心理学評論*, 55, 348-361.
- Nash, Fieldman, Hussey, Leveque, & Pineau (2006). Cosmetics: They influence more than Caucasian female facial attractiveness. *J. Appl. Soci. Psychol.*, 36, 493-504.

本研究は、白井 沙奈氏の平成 28 年度大阪樟蔭女子大学学芸学部被服学科卒業論文のデータを再構成したものである.